



# やよい図書館

## フレーズ&センテンス

『愛妻 納税 墓参り』 今回のフレーズは、書名と同じになりました。息子さんが書かれた政治評論家の三宅久之さん（2012年逝去）の回想録です。このフレーズは、三宅さんがサインを求められた時、色紙に書き添えていた言葉だそうです。政治記者から評論家に転じ、メディアに登場することが多かった三宅さんは文字通り生涯現役のジャーナリストでした。この本では早稲田大学時代は演劇に没頭していたとか、奥様とは恋愛結婚だったなど今までは知らなかった三宅さんが現れます。一方で、政治の重要な場面もたびたび登場し、大物政治家たちを叱咤したり励ましたり…。ご家族の愛が感じられる1冊です。熱く駆け抜けたその生涯をたどってみませんか。

『愛妻 納税 墓参り 家族から見た三宅久之の回想録』 三宅 眞/著 イースト・プレス (中井)

## 今月の1冊

『ただマイヨ・ジョーヌのためでなく』 ランス・アームストロング/著 講談社

黄色のジャージマイヨ・ジョーヌとは、世界最大の自転車レース「ツール・ド・フランス」で1位の選手だけが着られる栄誉あるジャージのことです。自転車選手である著者は25歳の時に睾丸ガンを患い、長い闘病生活の末に奇跡的な復帰を果たし、このジャージを勝ち取ります。その後さらに、ツール・ド・フランスで七連覇を達成するものの、ドーピングが発覚してすべての資格をはく奪される、という話題に満ちた選手です。この本ではドーピングの事実は伏せられていますが、文章からは著者の勝利への強い執着を感じることができるといいます。それは結果的にドーピングという違反につながってしまうのですが、著者をガンから救ったのもまた、この勝利への執着だったのではないかと感じました。(丸山)

## Cinema library 第4回 ぼくらの七日間戦争

「解放区より、愛をこめて」このセリフにピンときた方は、この作品に夢中になった経験があるのではないのでしょうか？今回ご紹介するのは宗田理の『ぼくらの七日間戦争』です。1985年の第1巻発行から現在まで、20巻も続く「ぼくらシリーズ」は10代向けのヤングアダルト作品として多くの人に愛されてきました。

物語は東京下町の中学校2年1組の男子生徒が、ある日突然姿を消すところから始まります。抑圧的な教師や過保護が無関心な保護者から脱却すべく、子どもたちは大人へ宣戦布告します。じつはこの作品、読み進めるとあることに気がつきます。「土手」「小菅の拘置所」「荒川と隅田川のあいだ」・・・そう、舞台が足立区周辺なのです。自分が住む地区で、「もしかするとこのへんかも・・・」なんて想像しながら読むのも面白いですよ。

映画編は1988年に第一作、1991年に第二作が公開されました。当時の中学校の様子が描かれているのですが、今見るとなかなか衝撃的です。この時代に中学生だった子どもも、今は敵対していた親の年齢に達しているはず。成長した今、この作品をどう感じるのでしょうか。当時の中学校の様子とともに、ぜひ感想をお寄せいただければと思います。

・『ぼくらの七日間戦争』宗田 理/著 ポプラ社

・『映画100物語 日本映画篇 1921-1995』岡野敏之/編 読売新聞社

※次回は「ブレードランナー」をご紹介します。どうぞお楽しみに！ (田中)



# 読書の窓

次回の読書の窓は  
9月号です

## 7月 「海」

7月21日は海の日ですね。夏休みが始まり、海水浴に出かけるという方も多いと思います。そんな楽しい季節にピッタリな本をご紹介します。

『ソウル・サーファー』

ベサニー・ハミルトン/著 ソニー・マガジズ  
サーフィンを楽しむ少女はその日も波を待っていた。左腕を水中でぶらぶらさせていると灰色のその影は静かに近付き、彼女の腕を奪っていった。しかし片腕を失った少女は、大好きなサーフィンをすること、生きることを諦めなかった。そして彼女の人生は変わった。「誰かが希望を見出す手助けができるなら、私が腕を失った価値はあったと思う」ハワイから届いた感動のノンフィクションをどうぞ。(佐藤)

『パイレーツ 一掠奪海域-』

マイクル・クライトン/著 早川書房  
世界中で大ヒットした映画「ジュラシック・パーク」など、多くの人気作品を残した著者が描く壮大な冒険小説です。舞台は17世紀のカリブ海。ジャマイカ国が公認する海賊「私掠」のやり手であるハンター船長がスペインの財宝船の掠奪を謀るべく、難攻不落の要塞島マタンセロスへ向かいます。度重なる困難に息もつかせぬ展開で、あっという間に引き込まれます！(本田)

『日本水族館紀行 翼の王国 books 決定版』

島 泰三/文 阿部 雄介/写真 木楽舎  
旅の途中、飛行機で手に取る機内雑誌に掲載されていた「日本水族館紀行」。北海道から沖縄まで、沿岸から大都市まで、多彩な写真とともにレポートします。記事だけでなく、写真に添えてある一言コメントにも茶目っ気があふれ、その土地ならではの独創性に富んだ水族館に行ってみたくなること間違いなし！フルカラーで心躍る一冊です。(田中)

★他にもこんな本

『海の果てまでつれてって』

アレックス・シアラー/著 ダイヤモンド社

『水深五尋』

ロバート・ウェストール/作 岩波書店

## 8月「家族に会いたい」

お盆休みには家族そろって故郷で過ごす、という方も多くいらっしゃるのではないのでしょうか。今回は、家族をテーマにした本をご紹介します。

『母やん』

川奈凜子/著 丸善プラネット  
舞台は昭和三十年代の熊本県、湯前町にある雑貨屋「丸屋」です。良き母、良き妻として家族を支えてきた母やん（がやん）の半生が未っ子「くみ」の視点で語られます。9人の子育て、夫の浮気、長男の上京、力道山事件、離婚…。様々な困難に立ち向かい、昭和の肝っ玉お母さんが活躍します！厳しくも優しい昭和の母親像が描かれた、家族ドラマです。(熊谷)

『エミリーへの手紙』

キャムロン・ライト/著 日本放送出版協会  
一人の老人が、病に侵されながらも家族のために遺したものの、それはパスワードが隠された自作の詩集でした。そして、パスワードを解くことで見つかったのは、不器用な彼が遺した家族への手紙だったのです。思いやりにあふれた彼の手紙が、ばらばらになりそうだった家族をつなぎ留めます。「死」という一つの終わりが、新たな「始まり」につながる物語です。(丸山)

『パパ、ママ、あいしてる』

エレナが残したメッセージ』ブルック&キース・デザリック/著 早川書房  
娘の脳腫瘍を宣告された両親が、娘との残された日々の記録を綴った日記です。娘のガンを宣告された両親の気持ち、なんて私には想像もつきませんが、彼らはただ運命を嘆くだけでなく、限られた時間の中で娘にとって最善を尽くそうと奮闘します。自分の家族に「愛してる」と伝えたい本です。(丸山)

★他にもこんな本

『東京タワー オカンとボクと、時々、オトン』

リリー・フランキー/著 扶桑社

『わたしのグランパ』

筒井康隆/著 文藝春秋